

## 港湾構造物と夢

牧瀬満治

第二次世界大戦中は、父の仕事の関係で欧米で育った私は、終戦の年に、外地より引揚げて来ましたが、日本の表玄関横浜港および首都東京の姿を見て、子供心にも暗たんたる気持ちにさせられたものでした。それは戦勝国と敗戦国との差、あるいは富裕国と貧乏国との差に対して感じられたのではなく、あたかもわが国の国民性を象徴するかのごとく、目にするすべてのもののスケールが小さく貧弱なのに驚かされたからです。

いつしか、日本の国土を狭いながらも世界に誇れる姿に変えたいという気持ちから、土木工学科に学び、恩師青木楠男博士の推薦もあって、東亜港湾に入社することになりました。正直に言って、それまで社名すら知りませんでした。社名の内容を調べれば調べるほど当社にほれ込む結果となり、希望に満ちた社会人生活のスタートを切ることができたのであります。

昭和31年入社以来、社長の岡部三郎博士の下で、各種設計計算についての薫陶を受け、大いに勉強になりました。5年間の本社勤務を終えてから下関支店に移り、当社自営のケーソン・ドック築造に従事し、昨年10月、めでたく竣工するに至りました。ケーソン・ドックは、西中国から九州にかけて皆無に近い状態だったので、今後当地方の港湾工事に大いに役立たせたいものだと思っております。ドック完成後、引続きドックに残り、現在まで、高さ3m余のものから11.5mのものまでのケーソン27函、その他ポンツーン3函を製作し、すえつけまで無事完了しています。目下のところ、ケーソンおよびポンツーン造りに生甲斐を感じているところですが、高さ18m以上の日本一の超大型ケーソン製作を

いつかこの長府乾ドックでする時が来るものと期待しています。このように、おもに港湾構造物関係にたずさわって来ましたし、またそれらの仕事に興味をもって当っておりますが、当社本来の事業すなわち、しゅんせつ・埋立については、より深い関心を持たざるを得ません。

当社の創業は明治45年、初代浅野総一郎翁が安田翁、渋沢子爵等財界有力者の支援を得て、横浜鶴見の埋立に着手し、わが国臨海工業地帯造成事業の基を開いたことに始まったのであります。京浜地区を初め、全国各地の工業地帯を完成し、わが国の産業発展に寄与するとともに、国土の拡張に貢献して今日に至ったのであります。過去この輝かしい社歴を、今後より一層発展させるべく、私は微力ながら埋立技術の研究改良、しゅんせつ船の近代化を図る面にも目を向けて、日本の埋立事業に、あるいはこの面での海外進出に大いなる夢を抱いて行きたいと思っております。

(筆者：東亜港湾工業KK・31年卒業)

## 名神高速での生活

山之口浩

名神高速道路P9工区は、天下わけ目の戦で有名な関ヶ原に設けられた近代的なインターチェンジをはさんだ、米原～上石津間24kmにわたる工区で、現在舗装工事が行なわれている。ここの工事は、梅雨が明けて空の一角に夏の様相がみえてくる頃は、施工も本格的に軌道に乗ってくることであろう。

私は、P9工区の試験班に所属して、工事用原材料の品質性と経済性を考慮して、所期の目的にかなうように原材料を選定する材料試験と、日本道路公団仕様書に規定された混合材を造り出すために選定された原材料の混合直前の品質管理と、舗装中の混合材の品質管理を担当している。前者の試験は、日本道路公団高速道路試験所で行なう承認試験に供

され、後者の品質管理は日本道路公団工事事務所が日常行なっている管理試験と併行して進められている。

舗装用原材料は、各地で生産されるため、工事工区によって、粒度・品質などの組合わせや使用法が異なり、常に検討を重ねて取り扱わなければならない。一方、仕様書の品質基準は（特に舗装工事においては）すべての場合についての規定はあるが、そのおのおの場合において限られた唯一の基準というものがなかったので、常に吟味検討を怠ってはならないのである。

P9工区では、現場舗設前に試験舗装も実施している。室内試験の結果が、実際にどのように出てくるかということに実に興味深いものがある。しかし、試験舗装は、当初の材料で実施しているだけに、実際の施工が進むにつれて、原材料の品質・性状が変わってくることもあれば、予想もできなかったような難問が飛び出して、大いに悩まされることもある。私はその都度、材料選定や当面的問題について、必要かつ十分な調査や実験をくり返し、その結果を判断して、実際の施工に応用している。そして、試験舗装では、施工についてのすべての問題が満足されるほか、それまでに払われた綿密な調査や企業努力を如実に物語っているようなものであることを常に願っているのである。

これらの実験ができるのは、現在の日本ではごく一部の大工事に限られているようである。だが私は試験舗装だけではなく、道路全体が試験であるような道路を造ってみたい。たとえばAASHOのテストロードのような試験道路を日本でも造ってみたいと夢にえがいている。その時には道路をめざすあらゆる部門の若い技術者が集まって、あらゆる角度から検討し試験して、新しい道路工学の基幹を生ませてみたいものと望んでいるのである。

(筆者：日本舗道KK名神関ヶ原工事事務所)